

中国のほんの話(60)

## 文豪と漢詩（其の弐）

### ～ 井伏鱒二『厄除け詩集』～

蔭山 達弥

創作詩と有名な漢詩を訳した「訳詩」から構成された、文豪・井伏鱒二の『厄除け詩集』。「散文が書きたくなくなる時、厄除けのつもりで」書いたという詩を集めたものである。初版は1937年、野田書房から刊行されたが、昭和52年7月に筑摩書房から改訂版が出された。その後記で井伏はこう述べている。

「これは以前に出した『厄よけ詩集』の改訂版である。もとの本にはずぬぶん誤植があった。今度それを直し、そのほか氣になるものや消したいものは取除いた。消した穴埋めには、後に書いたものや、思ひ出したものを付加へた。「厄よけ」は「厄除け」とした。私としては自分の厄除札の代りにしたいつもりである。」

『厄除け詩集』に載せられた晩唐の詩人、于武陵（810～？）の『勸酒』（酒をすすめる）は井伏鱒二の名訳として、よく知られる。

コノサカヅキヲ受ケテクレ ドウゾナミナミツガシテオクレ

ハナニアラシノタトヘモアルゾ 「サヨナラ」ダケガ人生ダ

原詩の読み下し文は、「君に勸む<sup>きんくつし</sup>金屈<sup>きんくつし</sup>／満酌<sup>まんしやく</sup>辞するを須<sup>もち</sup>ひず／花<sup>はな</sup>発<sup>ひら</sup>きて風雨多し／人生別離<sup>べつり</sup>足る」

「金屈<sup>きんくつし</sup>」は黄金のジョッキ。「満酌<sup>まんしやく</sup>」は、杯いっぱい酒を注ぐこと。「辞するを須<sup>もち</sup>ひず」とは、辞退するには及ばない、の意。春、花が満開となると、きまって春の嵐が吹き荒れる。のんびりと花を楽しんでいられないのが無常の世のならい。無常の世の人生には、悲しい別れがつきものなのだ。「別離<sup>べつり</sup>足る」とは、別れがたっぷりある、ということ。だからせめてこの別れの酒を、心ゆくまで飲んでほしいというのがこの詩の内容である。（『漢文名作選 3漢詩』大修館書店）

軽妙、洒脱にして、ユーモアと哀愁にみちた言葉を自在に駆使した漢詩訳は井伏鱒二独特のものだ。

盛唐期の詩人、高適<sup>こうせき</sup>（707？～765）の『田家春望』、彼が久しい間不遇で河南河北を放浪していた頃の作。「出門何所見／春色満平蕪／可歎無知己／高陽一酒徒」読み下し文は「門を出でて何の見る所ぞ／春色平蕪に満つ／歎ず可し知己無きを／高陽の一酒徒」（目加田誠訳『唐詩三百首』3、作者略伝、東洋文庫267、平凡社）

この詩が井伏鱒二の手にかかると飄逸としてくる。軽みとなる。



ウチヲデテミリヤアテドモナイガ 正月キブンガドコノモミエタ

トコロガ會イタイヒトモナク アサガヤアタリデ大ザケノンダ

この井伏鱒二の訳詩が、江戸時代的美濃派の俳人中島魚坊（号は潜魚庵）の「唐詩選和訓」「白挽歌」「唐詩五絶白挽歌」写本の影響下にあるとする土屋泰男や寺横武夫の研究成果が発表された。井伏鱒二のオリジナリティーとはいえなくなったわけである。しかし、「アサガヤアタリデ大ザケノンダ」とか、『「サヨナラ」ダケガ人生ダ』とかの文章の呼吸は、どうしようもなく井伏節である。そしてあらためて感じ入るのは、日本人の身体にしみこんだ七五調のリズムの妙である。江戸の俳味の遊び心が、潜魚庵 — 井伏鱒二をとおって、一直線に日本人の心性にしみとおる。そこでは唐詩と和詩の区別はない。井伏鱒二は唐詩と和詩の区別をこえる七五調の遊びに意識して戯れたのだろう。（川西政明『昭和文学史』上巻465頁、講談社）

「春眠暁を覚えず」で有名な孟浩然（689～740）の名詩、『春暁』の井伏訳。

ハルノネザメノウツツデ聞ケバ トリノナクネデ目ガサメマシタ

ヨルノアラシニ雨マジリ 散ツタホノ花イカホドバカリ

井伏鱒二の詩を読みたい人は、講談社文芸文庫から『厄除け詩集』（ISBN:4-06-196267-1）、岩波文庫から『井伏鱒二全詩集』（緑77-4、ISBN:4-00-310774-8）が出ており、井伏鱒二のユーモラスで滋味あふれる作品世界を、画家・金井田英津子が情景豊かな挿絵で表現した『画本 厄除け詩集』（長崎出版、ISBN:978-4-86095-528-1）も昨年出た。

かげやま たつや（教授・中国文学）